St. Luke's International University Repository

がんではないのに〝陽性〟反応？

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2013-07-03 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 中山, 和弘 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10285/10516

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.

ヘルスリテラシー向上ゼミ

がんではないのに〝陽性〟判定？

聖路加看護大学保健医療社会学・看護情報学教授
中山 和弘

私の会社では、社員が健康に働けるよう、がん検診にも力を入れています。受診率の向上にも取り組んでいますが、気になるのが“偽陽性”や“偽陰性”の問題です。偽陽性のために、不必要な再検査指示を受けてしまう人も少なくないという話も耳にします

がんの早期発見・早期治療のために、検診は非常に重要です。ただ、がん検診に限らず、検診は万能ではありません。改めて、日頃受けている検診について理解を深めましょう

がんではないのにがんの疑いあり ＝ 偽陽性	がんなのにがんではないと見逃される ＝ 偽陰性

なぜ、がんではないのに〝陽性〟と出たり、がんなのに〝陰性〟と出たりするのでしょうか

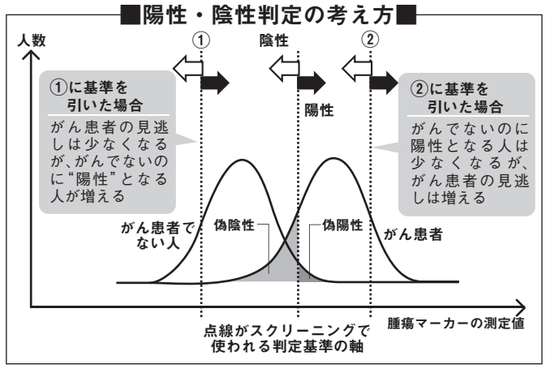
検査で陽性、すなわち、〝がんの疑いがある〟と判断する方法が関係しています

がん検診での検査は、精密検査をする前の、あくまで〝がんの疑い〟を発見する方法で、最終の診断をするものではありません。英語ではスクリーニングといいますが、これは「ふるい分け」のことです。スクリーニングには「網戸」という意味もあって、空気は通しても、蚊やハエなどは引っ掛かって入れないようにする、まさに病気の疑いのある人は素通りさせないということです。

たとえば、腫瘍マーカーというものを知っていますか？ 血液中のたんぱく質などの量を測るもので、とくにがん細胞から多く作り出されるものを測ります。血液を採るだけの簡便な検査のため、よく使われています。実際にがんであるかどうかは、これだけで判断はせずに、超音波検査やCT、MRIなどの画像診断と合わせての判断になりますが、腫瘍マーカーの数値によって、がんがあるか、その種類は何か、どのくらい進行しているのかなどを知ることができます。

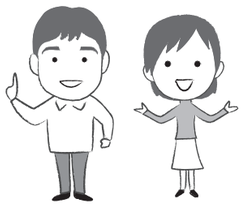
腫瘍マーカーでは、ある数値を決めて、それを超えるかどうかで、陽性か陰性かを判断します。血圧や血糖値で、高血圧や糖尿病について考えるのと同じで、数値のどこかで線引きをするわけです。数値が1違うだけで、判断が分かれる可能性もあります。この線引きは、多くの「がん患者」と「がん患者でない人」の測定値をもとに決められています。左図のように、

■陽性・陰性判定の考え方■



この2つのグループの山（縦軸は人数）は重なっていることが多いのです。がんがなくても数値が高かったり、がんがあっても数値が上がらなかったりする人もいるからです。

そのため、どこに線を引くかで陽性、陰性の割合は変わってきます。図の左のほうに引けば、陽性の人が多くなり、「がん患者」を見逃すこと＝「偽陰性」が少なくなるのですが、その代わりにがんではないのに陽性になる人＝「偽陽性」が増えてしまいます。右のほうに引けば、「偽陽性」は減るのですが、「偽陰性」が増えてしまいます。このように一方をよくすれば他方は犠牲になる関係を「トレード・オフ」の関係といいます。このことはがん検診にかかわらず、数値で判断する検査すべてにいえることです。人間は多様な生きものなので、そこに正確に線を引くことは難しいのです。



中山和弘先生
花子さんにヘルスリテラシーについて教え、産業保健活動をサポート。

花子さん
新米産業保健師。ヘルスリテラシーに関心をもち、中山先生のもとで勉強中。

がん検診を受けることによるリスクはどのようなものがあるのでしょう？

不必要な精密検査や過剰診断があげられます

がん検診の目的は、早期発見によって、早く適切な治療をして治すことです。もし、「偽陽性」であっても、精密検査をすれば、より正確なことがわかるわけです。したがって、見逃さないことを重視すれば、少しでも疑わしければ陽性とすることもやむをえないでしょう。しかし、それによって、結果的には不必要な精密検査が増えることになります。たとえば、内視鏡による検査でも、ごくまれに事故が発生することもありますし、X線検査やCT検査では、放射線を浴びることでがんになる確率が高まったり、遺伝的にも影響することも、とても低い確率ですが、ゼロだとはいえません。

また、がんはがんでも、まだ小さくて、その後も進行がんにならず、死ぬまでに影響が出ないがんを見つけてしまうことがあります。これを「過剰診断」といいます。しかし、実際にはこれを区別することはできないため、早期治療を優先すると、このような不必要な手術などを行わざるを得ないことになります。

そして、がん検診を受けること自体、そんなに楽しいことではありません。結果として見つからなければいいですが、見逃しはまったくないわけではないし、結果が出るまでは不安です。検診で陽性の判定が出て精密検査になれば、さらに不安は高まります。

しかし、がん検診の最大のベネフィットは、早期がんが見つかって治療すれば、命が守れるということです。また、がんでないことがわかれば安心が得られます。がんで亡くなる人はまだ多いですから、情報がたくさん入ってくるたびに不安に脅えるということもなくなるというものです。ですからその効果を十分に理解して、意思決定することが大切でしょう。

メリット
早期発見・早期治療、死亡率の低下、QOLの向上など

デメリット
不必要な精密検査、過剰診断、放射線等の影響など

検診結果について不安なときの相談窓口

がん検診の結果について不安なときは、検診を受けたところで相談するのが第一だと思いますが、ほかにも相談したいときは、全国のがん診療連携拠点病院（397施設）に設置されている「相談支援センター」があげられます。がん全体のことについて、どなたでも無料で相談できます。お近くのところを探すには（独）国立がん研究センターがん対策情報センターのサイト（http://ganjoho.jp/public）を見るとよいでしょう。

また、静岡がんセンターによる「Web版がんよろず相談Q&A」（http://www.scchr.jp/cancerqa.html）は、2003年度に実施された全国調査の結果をもとに、1万件ものがん患者の悩みや負担と、それについての助言などが掲載されているサイトです。内容別に検索できるので、何か困りごとがあったときには役立てください。